

2014.1.19 「イエスの叫び」 ヨハネによる福音書7:1～13、37～39

イエスは、ユダヤ人から命を狙われていた。この時、仮庵祭が行われていた。イエスは、その祭りに行くことを勧められたが、「わたしの時はまだ来ていない」と言って断る。祭りに行けば命を狙っているユダヤ人に捕まるおそれがあったからであろうか、「イエスはガリラヤにとどまられた」と記されている。しかし、「兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエスご自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」と記す。「行かない」と言っていたのに、「隠れるようにして・・・行かれた」とある。そして、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。」「何故イエスは、命が奪われる危険を冒してまで祭りに出かけたのか？ 大声で叫ばずにおれなかったのか？

当時のユダヤの地は、ローマ帝国の植民地として、重い税金が課せられ、軍備が強化されていた。仮庵祭と言っても、そこで喜んでいる者は、ほんの一部のユダヤ人で、権力を持つ富裕層の者たちだけで、多くの人々は、貧しさのゆえに、先の見えないユダヤの社会情勢のゆえに、身も心も疲れ切り、渴ききった状態にあったのである。神の恵みを祝う喜びなどどこにも見出せずにいた。イエスは、その人々の嘆き、渴き、その現状に向き合い、もうご自分のことなどそっちのけでさげふのである。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れるようになる。」

イエスの水を飲むとは、イエスの言葉、聖書の言葉にすがり、信じて歩むということ。私たちはその時、まことの恵み、まことの力、まことの勇気が与えられて行くものかと思う。あのキング牧師は、黒人解放運動のために、リーダーとして勇気ある働きをしてきたが、それでも「白人から迫害され、危険にさらされ、投獄されたりすると、こんな運動さえないならば、安全だし、家族と楽しく平和に伝道者の生活ができるのに。そういう人もいるのだ。もうやめよう、としばしば思う」ことがあったとある。

イエスの水は一過性の水ではない。絶えず溢れ出している泉なのである。弱さのある私たちに泉は流れている。まことの平和を伝えるために、イエスは、勇気をもって叫んだのだ。その姿に、教えられ、慰めを受け、勇気を与えられて、今を生きて行きたい。(神谷)